

上田 敏（東京大学）著

リハビリテーションを考える

大川嗣雄（横浜市立大学）

わが国にリハビリテーションという言葉とともにその理念や技術が入って来てから、ほぼ30年になろうとしている。それ以後、多くの分野で、様々な形でリハビリテーションはわが国でも発展して来た。その発展に指導的役割を果たして来た人達は数多くあげられようが、上田敏氏はその中でも最も顕著な業績をあげて来た人の1人であることに誰も異存はないと思われる。

上田氏の数多くの業績の中でも、氏はリハビリテーション医学の立場から、リハビリテーションの理念の確立とリハビリテーション医学の独自性と専門性の確立に貢献して来たことが高く評価されよう。

その上田氏が、障害者の全人間的復権という副題を持った本書を著した。本書は上田氏の20余年にわたるリハビリテーション専門医の立場からの臨床、研究を通じて確立して来た著者のリハビリテーションの理念を集大成したものである。

本は序章から終章に至る6章から成っており、著者は序文の中で「障害者の復権」を第一主題に「それを達成するための学問・技術」を第二主題としたソナタ形式と述べているが、評者はトリオ形式をとった交響詩のような気がするのである。すな

わち、第一主題として上田氏は序章、障害者の全人間的復権としてのリハビリテーション、第1章、障害をどうとらえるかの二章で、リハビリテーションの理念を展開している。この中を流れる基本的な考え方は、障害者の全人間的復権であり、このためには障害者の自立、ノーマライゼーションなどの思想を全人間的復権の中に正しく位置づけることの重要性を説いている。さらに、今後への展開の方向として、リハの目標をADLからQOL（この訳については明確にしていないが）への質的転換をなすべき時期に至っていると示唆している。また、第1章では障害のとらえ方として、障害の3つのレベルを詳述した後、著者によって体系づけられたともいえるべき「体験としての障害」の論説をのべている。

評者の考える第二主題は、第2章リハビリテーション医学を考える、第3章障害者の心の世界を考える、で奏でられているように思われる。

第2章では、すでにのべたように著者の業績を彩るリハビリテーション医学の独自性と専門性についての、氏の豊富な学識とリハ医学にかける情熱が脈々と流れている。第3章では、氏が最近になって新しく体

系づけようと努められている障害者の心の世界に対する視点が語られている。第2章はリハ医学以外のリハ専門家に良く読んで欲しい章であり第3章はリハの専門家と思っている全ての人への警句に満ちている。

著者と評者の意見の相違は、第4章、トータル・リハビリテーションへの道、第5章、リハビリテーションにおける倫理と論理の二章についてである。著者は自らのべていないが、この二章は著者の序文のニュアンスからは、第一および第二主題の変奏のように思っているのではないかと感じられる。しかし、第4章の各分野に対する率直な提言、終章の自らに対する厳しい姿勢、いずれをとっても、私の知る限りにおいて、リハビリテーションという領域における新しい主題ではなからうか、リハ関係者にとっての必読の章である。

とても、批判の筆をとれるような私でないが、敢えて言わせてもらえらるならば、現在おかれている日本の状況に対してリハ関係者のとるべき最善の道は、技術としてのリハ医学の今後への具体的な方向の示唆、障害者の心の世界に与えるリハ医学の技術の影響、医学の障害者に対して行って来たことへの反省などについて言及して欲しかったと願うものである。しかし、ソナタ形式であろうがトリオであろうが、この本にはバッハの名曲のように、著者の障害者への愛情という1つの主題が自在に展開されていると感ずるのである。

（19.5×13.5cm、頁316、1983、
¥2,000、青木書店 刊）